

# アメリカと日本の間に生きる沖縄人

佐川朝紀

## 第一章 イン트로ダクション

この章では、本研究の序論、研究内容、研究の意義について述べていく。

### 1.1 研究のきっかけ

私は沖縄から東京に出たことで、沖縄の昔の生活や歴史、言葉を質問されることが多くあった。沖縄に住んでいた頃は沖縄について深く考えたことがなく、自分が沖縄出身であるという事実を意識することは無かった。東京で学生生活を始めてから様々な人に沖縄のことを質問されることがあった、しかし答えることのできない質問が多くあった。様々な質問に答えていく中で、沖縄が太平洋戦争後の生活の中で方言がどう変わったのか、戦後の沖縄の生活と教育がどういうものだったのか、ということについて知りたくなった。そして、私は家族の歴史を聞いたことがなく第二次世界大戦後のアメリカ統治の頃から日本復帰までの家族の生活が知りたくなった。そのため戦後の生活を家族の歴史の中から見てみたいと思ったのが、この研究のきっかけである。

### 1.2 研究方法

ライフヒストリー（谷,2008）の研究方法を用いて研究を行う。まず、対象者は私の祖父母と両親である。そして、それぞれの対象者にインタビュー形式で会話を録音して、当時の生活を思い出してもらいながらライフヒストリーを構築していく。そしてインタビューを書き起こして、そのデータを見ながらアメリカと日本の間に生きる沖縄人の生活の実態を描いていく。

### 1.3 研究の目的と結果

この研究の目的は、第二次世界大戦後に私の家族がどのような生活を送り教育を受けたのかということと、戦後の家庭環境の変化がどのような社会と生活に現れているのかについて家族の歴史を記録として残しておきたい。

第二次世界大戦後の沖縄の生活を私の家族から見ていった結果、アメリカ統治によって沖縄人が日本とアメリカの二つの文化に挟まれながら生活してきたことが分かった。

### 1.4 研究意義

第二次世界大戦後に沖縄特有の言葉である方言や、後の沖縄の人がどのような生活を送り教育をうけていたのかを多くの人に知ってもらいたいというのが本研究の意義である。

## 第二章 沖縄の研究

この章では、沖縄人のアイデンティティーについて述べていく。

### 2.1 沖縄人のアイデンティティー

林（2005）の研究から見てみると、ここで述べたい事は第二次世界大戦後の沖縄において沖縄人はどこの国に属し何人だったのかということである。沖縄のアイデンティティー問題については様々な意見があるが、その始まりは琉球の時代からであるといえる。沖縄は元々、琉球という小さな王国であったが1609年に薩摩の侵攻により強制的に日本に併合された歴史がある。この時から沖縄にはアイデンティティーの問題があり、沖縄人（うちなーんちゅ）または琉球人というアイデンティティーが強く表れている。また、第二次世界大戦前から行われていた方言札等にもみられる日本政府からの沖縄文化への抑圧的政策があった。そのことから、より沖縄人としてのアイデンティティーを強くしたと思われる。このことから沖縄では長い間、沖縄人アイデンティティーと日本人アイデンティティーの二つの間で葛藤してきた。そして、太平洋戦争後のアメリカ統治の時代になると日本本土の文化とは異なっている独特な沖縄文化を形成していった。沖縄が日本に復帰する際

の沖縄返還交渉において沖縄の人の参加が許されず、また沖縄人の要望も受け入れられず日本に返還されたため、沖縄の人の日本に裏切られたという気持ちで沖縄人アイデンティティを強く意識させることになったといわれている。

### 第三章 ライフヒストリー

この章では、ライフヒストリーとは何か、ライフヒストリー研究の特徴、ライフヒストリー研究を用いて行う理由と調査対象者、データ収集の方法について述べていく。

#### 3.1 ライフヒストリー研究

ライフヒストリー研究とは、生活史や個人史と呼ばれるある人の過去から現在までの出来事を聞き取り記録することによって研究していく方法である。この研究でよく使われる研究方法は人生の歴史を研究対象者と対話しながら記録を録っていき、その記録を元に研究対象者のこれまでの人生のある側面を研究していく方法である。そして、調査にあたり対象者のどの面を見たいのか、理解したいのかという事が大事になってくる。人生体験を聞いていくにあたり、谷（2008）は調査者の主体的な視点があって初めて知りたい面に対する意識が表れると言っている。このように調査する人がどのような面を見たいという視点があることで、その側面のライフヒストリーを聞き出す事ができるということである。そして、ライフヒストリーの調査で最も重要な事はどれだけ研究対象者の人生に踏み込むことができるのかということである。よって、ライフヒストリー研究において最も大事になってくる事は研究対象者との関わり方である。そして、研究法において信頼関係をしっかり築くことによって対象者の人生を深く知ることができるのである。

#### 3.2 ライフヒストリー研究法を用いる理由

私は沖縄が第二次世界大戦の後、どのような経緯で今の沖縄に成っていったのかを知りたいと思い、沖縄の生活を日常生活の側面から研究していく事にした。そこで私は、沖縄の生活を家族である祖父母、両親からデータを取

り、私の家族の歴史研究を通して沖縄の生活の変化を見ていきたいと思った。よって家族の生活がどのような様子だったのかを研究するにはライフヒストリー研究法が必要であると考えこの方法を使うことにした。

### 3.3 データ収集方法

私の家族である祖父、祖母、父、母の4人に対話形式で戦後の歴史を記録していく。

#### 祖父母

祖父は、昭和13年10月10日沖縄県那覇市小禄に生まれた。終戦後は畑があったため農業をして生活していた。祖母は、昭和15年12月10日沖縄県嘉手納町に生まれた。終戦直後は家に畑が無いので馬の鞍等を作って生活していたという。祖父母が結婚してから那覇で沖縄の特産品の扇や沖縄の行事等で必要な餅やムーチャー等を販売して生活していた。子どもが7人居る家族で仕事を手伝いながら生活していたという。2人の子どもの時代は戦後の生活がどのようなものだったかが表れている。

#### 父

父は現在61歳で昭和28年10月3日に沖縄県那覇市に生まれた。小、中、高校は沖縄の学校をでたが、高校卒業後県外の専門学校へと進んだ。父の生まれた時代は戦後の変化が教育の面でよく現れているといえる。また、生活の中にアメリカの文化が多く見られる。

#### 母

母は現在50歳で昭和39年10月28日沖縄県那覇市小禄に生まれた。7人兄妹の長女で、家庭の手伝いや新聞配達をしながら兄妹の面倒を見ていた。沖縄が日本に変換される時は小学生で子どもながらに周囲が変化していくことが良くわかったという。

以上の4人には子どもの頃の生活はどのような様子だったのか、復帰後と変わったことは何か、記憶に一番残っている出来事は何か、等の質問を通して話を広げていき、それぞれの自分の歴史を語ってもらった。また、研究対象者の年代が違うので、それぞれの年代と生活の変化を比較して共通した部分を研究していく。

## 第四章 アメリカと日本に生きる沖縄人

この章では、研究対象者に語ってもらった人生経験の記録を用いてアメリカ、日本それぞれの視点から戦後沖縄の生活の実態を家族の経験から描いていく。

### 4.1 アメリカとしての沖縄

#### 4.1.1 援助と助け合いの生活

この会話は2014年3月14日に記録したものである。

私：小さい頃、戦後ってどんな生活してたの？

おばあ：①はあ！とっても貧しい生活さ。最初はね終戦後なって時期は、配給があったわけさ、あの、いろんな缶詰の配給とかあんなの。

私：それは国から？

おばあ：②あっち、アメリカからでしょ。たぶん、持ってきたんでしょみんな外国の品物だから缶詰は、でこんなのは。ちょうどあの戦争のとき、あの、とかあんな時はみんな、あれ送るでしょ？あんなのでしょ。たぶん。みんな外国のだから、缶詰から、いろんなの。またあの、このみんな集めてね、芋掘りさせて、芋掘りに行かせて班長決めて芋掘りに行かして、この掘ってきた芋をみんなで分けるとか、そんなやっていたみたい。自分も覚えていないけどさ、で缶詰とかあんなのは戦果言うて海に流されているの皆行ってからにこの海から拾ってきたり、またあの外人の所から盗んできてとかやりよったはずよ

上記の会話では沖縄の太平洋戦争直後の生活の様子が語られている。当時はアメリカに統治されたためアメリカからの食料配給によって生活していた事が分かる。また、それだけでは足りないため地域の人たちで協力して食料を確保していたことや、戦争時に海に落ちた缶詰等を拾って生活していたことが分かる。これらのことから戦後の生活はアメリカの援助と周りの人との助け合いで成り立っていたと考える。しかし、アメリカ軍から盗む人や、戦

争で残されたアメリカ軍の食料を拾っていた人もいたことから、生活はとても貧しい物だったと言うことができる。②にある戦果とはアメリカ軍から盗まれた物資等のことをいう。以下の会話は続きである。

おばあ：戦後から今までさ。終戦後なって時期は、もーみんな、あの一働こうにも何にも無いからもう拾ってきたり、また畑がある人は畑をしたわけさ。畑も何も無い人たちはもうアメリカーに使われたり、海でまた品物拾ってきたり。だから、海で品物拾いに行ってからに死んだ人もいるんだよ。あの一溺れて。

この会話から、畑がある人たちは畑で生活することができたが、畑が無い人は命がけで海に潜って缶詰等を集めたり、アメリカ人のところで働くことで生活していたことがわかる。これらのことから、終戦直後の沖縄は働く場所が無く食べて行くにも命がけの生活をしていた人もいたということと、生活のほとんどがアメリカの援助によってできていたということがみえてきた。

#### 4.1.2 アメリカドルと日本円の混在する日常生活

この会話は2013年11月17日に私と父、母での会話を記録したものである。

私：沖縄が復帰する時で一番覚えている事ってなんね？

母：①お母さんが沖縄が復帰した年は小学校1年か2年の時だから復帰前には生まれていただけ、ドルとかを使っていたことはそんなに覚えてないんだけど、大人たちがドルから円に変わるから銀行に行くって話しをしていたのは覚えているよ。物価が上がるって大変だって話しをしていたさ。

私：じゃあ沖縄では完全にドルが流通していたんだ？

母：②もちろんさ。幼稚園生くらいの時にドルで買い物に行っていたから、でも小さい時だからそんなに覚えてない。

私：じゃあお父さんみたいに映画観に行ったって話しはないんだ？  
記憶にある事は？

母：③ないない。1センとか2セン持って買い物に行った。沖縄にはいっせんまちやってあるさ？

私：いっせんまちや？ 聞いた事無いけど

母：④あれさ、駄菓子屋さんのことさ。

私：いっせんって1セントのこと？

母：⑤そうそう、昔は1セントでいろいろ買えたから、学校の周りにたくさんお店があったよ。

私：だから今でもいっせんまちやって言うのか。売っているものは日本のものだったの？

母：⑥そうだよ。売ってるものは日本の駄菓子だったけどさ。

上記の会話から母の小学生時代の生活を見ることが出来る。③下線部から小学生の頃、買い物をする時の通貨がドルであったということと、いっせんまちや、と呼ばれていることからドルがどれだけ浸透していたのかがわかる。また、①下線部から沖縄が日本に復帰した際にドルから円へ変わると物価の変動等で沖縄の家庭への影響があったことが分かった。そして、沖縄の人たちがドルの使用が当たり前であることから沖縄の人がアメリカ人として生活していたことで、日本復帰により円へと変わる時、経済的に混乱がおきたのではないかと考えられる。

#### 4.1.3 複数のパスポートに表れた沖縄人のアイデンティティー

次の会話は、2013年11月17日に私と父、母での会話を記録したものである。

父：①復帰前は朱色のパスポートが本土と沖縄間を行き来するためにあったわけよ。

私：じゃあパスポートがないと日本本土に行けなかったのか。完全に外国あつかいだね。

父：②だけど、これは本土に行く為だけのパスポートだから外国にはまた別の外国用のパスポートがあったからさ。パスポートにはアメリカ合衆国って書いてあった。

私：もう本当にアメリカだったんだ、本土用と外国用の二種類も必要だったのか。

父：③東京から沖縄に戻るときは食べ物を没収されたよ、沖縄に持ち込んだらだめなものが結構あったから。



↑これは戦後沖縄で琉球列島米国民政府によって発行されていた2種類のパスポートである。右が日本に行くためのパスポートで、左が外国に行く時に使用するパスポートである

上記の会話から戦後沖縄がどこの国に属し生活していたのかを見ていく。①から沖縄から本土に行く為にパスポートが必要だったということは沖縄が日本では無かったことが読み取れる、また②からアメリカの統治下であるという事が強く分かるものでもあるといえる。そして、本土へ行くためのパスポートとは違い、海外用のパスポートもあったことから沖縄がどこに属しているのかを謎にしているものでもある。③からも外から沖縄に持ち込むものを制限することで沖縄の生活の中で日本の物があまり入って来ないことがわかる。このことから、アメリカが沖縄に規制をかけることにより、沖縄が日本ではないということを本土の人たちに強く印象づけたのではないかと考え



る。

#### 4.1.4 日常生活と基地

この会話は2014年10月27日に私と母の会話を記録したものである。

私：小さい時って身の回りの環境ってどうだったの？

母：①やっぱりほら基地問題が小さい頃からあったさ、まあ小さい頃小禄は、結構基地だったわけよ、あの、ジャスコの所とか、宇栄原の方行ったらすぐもうフェンス張られて、もうどこにも行くところがないわけさ、本当に、ちょっと行ったらフェンス張られてあって拳銃を持った軍人が警備していたからさ、そこに入ったら拳銃で殺されるとかさ、そういう風に言われていたからさ。みんなで、あの、這いつくばって、移動したり、近くまで行ったら殺されるって言われていたから。

私：本当に？ 這いつくばってってなに？ほふく前進みたいな？

母：②そうそう。ほふく前進

私：大人も？

母：③遊んだら駄目って言われていたからさ！ ほふく前進してフェンスの周りを移動するわけさ。

私：何の為に？

母：行きたいところに行くため、通らないとどこにも行けなかったから。

上記の会話から、沖縄の生活に基地が現在より密接だったことが分かる。①から母が小さい頃は現在より基地に囲まれた環境で生活していたことで何処へ行くにもフェンスの周りを通らないといけなかった事が分かる。また沖縄の人は基地が身近にあることで自由に外を出歩くのが安全ではなかったのでは無いかと考えた。

#### 4.1.5 食文化の変化

この会話は2014年10月27日に記録したものである。

母：①お母さんが小さい時から A&W あったよ。

私：小さい時から?これは戦後にアメリカから持ち込まれたものでしょ?

母：②そうそう。

私：じゃあアメリカのもんだよね A&W って

母：③小学校の時、お家の近くにあったわけよ。

私：へえ。ファーストフード?もしかしてマックより早いんじゃない?  
あれなのかなあ、アメリカ人のために作ったのかな。今では沖縄  
のって感じだけど

母：④そうかもしれない。一号店が屋宜原だから。屋宜原っていったら  
普天間の近くだもん。

上記の会話から沖縄の食生活の中にアメリカの食が入って来たことがわかる。①から母の幼い時から A&W があったということでアメリカ統治の時代に沖縄に入ってきたことが分かる。この A&W とはアメリカのカリフォルニア州で出来たファーストフードのお店で、創業者の頭文字をとって名付けられた。沖縄県外にも進出していたが、沖縄県以外では受け入れられず、全て撤退したため、今では沖縄の食文化となっている。そして、④からこのお店ができた理由がアメリカの大きな基地があったからではないかと考えた。

#### 4.1.6 分析から見えてきた事

上記 4.1 で語られたことから、太平洋戦争後にアメリカの統治下になったことから沖縄の生活にアメリカとしての沖縄という変化が見られる。戦後は畑のない家は仕事がなかったため、アメリカから援助してもらいながら生活し、通貨もドルを使うことが普通の生活になっていたことがわかる。そして、食文化も日本本土よりも早くファーストフード店ができ生活はアメリカ化していたことがわかる。また、戦後に琉球列島米国民政府から発行された二つのパスポートから沖縄が日本ではないと感じさせる印象をもたせている。しかし、アメリカ軍に対する恐怖心や不信感等が母の体験から見られるため生活はアメリカ化してはいるが、アメリカを受け入れてはいなかった。

## 4.2 日本としての沖縄

### 4.2.1 戦後の教育から見た方言の変化

この会話は2014年3月14日に記録した祖父との会話である。

私：方言札してたってどういうものだったわけ？

おじい：①方言札は標準語でいこう言うてね、あの一札掛けるわけよ。  
方言で話した人にね、それで他に方言話した人にまた、掛けるわけさ。 どんどん、どんどん

私：これって沖縄全部が？

おじい：②ええ、ほとんどあったはずよ。田舎は。那覇方面は標準語使う人いたさあ。で、この本（教科書）でも標準語で書かれているさ。だからそれを無くすために、標準語でいこうって、方言で喋ったらその土地の言葉がでるさ。それを無くすためにもやったはずよ

私：あー、なるほどね。沖縄はあちこちもう、方言違うから標準語にしたら、

おじい：③ええ、みんな同じになる。

私：一緒になるからね。

おじい：④やんばるの言葉はここでは分からんよ。だから、こっちの言葉もまたあっちではわからんさ。

上記の会話から沖縄の戦後の教育がどのように変化したのかを見ることが出来る。①に出てくる方言札とは方言を話した子に札を掛けて、別の子が話しているのを見つけたらその子に掛け替えていたという。これは、方言を標準語に変えるために日本の言語政策として沖縄全土で行われていた。そして、②から教科書が標準語ということで、話す言葉も標準語にしよう、と言うようになったことがわかる。その理由の一つとして②下線部、③に出てくるように地域によって言葉が違うということが語られている。これらのことから、戦後の教育の中に方言札を取り入れたことで子ども達に方言を喋るのを強制的に禁止したことで、子ども達に方言で喋ることは悪いことだと認識させ公の場から方言の使用が減少したと考えることができる。

#### 4.2.2 複数のパスポートに表れた沖縄人のアイデンティティー

次の会話は、2013年11月17日に私と父、母での会話を記録したものである。

父：①復帰前は朱色のパスポートが本土と沖縄間を行き来するためにあったわけよ。

私：じゃあパスポートがないと日本本土に行けなかったのか。完全に外国あつかいだね。

父：②だけど、これは本土に行く為だけのパスポートだから外国にはまた別の外国用のパスポートがあったからさ。パスポートにはアメリカ合衆国って書いてあった。

私：もう本当にアメリカだったんだ、本土用と外国用の二種類も必要だったのか。

父：③東京から沖縄に戻るときは食べ物を没収されたよ、沖縄に持ち込んだらだめなものが結構あったから。

4.1.3 でも見てきたように、上記の会話から戦後沖縄がどこの国に属し生活していたのかを見てみる。ここで日本として見てみると、パスポートが無いと日本本土に入ることができなかったことから日本ではないように思われる。また、パスポートには琉球列島米国民政府とあることから属する国としてはアメリカであったということが分かる。

#### 4.2.3 本土の人の目に映った沖縄人

この会話は、2013年11月20日に私と父の会話を記録したものである。

父：①昔はこんなのがあったよ。

私：何？

父：②川崎に、朝鮮人・沖縄人お断りっていう看板がたくさんある場所があったよ。

私：は！何だよ？

父：③沖縄から出稼ぎの人がたくさんいてみんな集まると自分たちの言

葉使うさ？やっぱり人間知らない言葉で喋られると何を話しているか分からないのが怖い時代でもあったと思うわけよ。文句言われてても分からないさ？だから方言しか話さない人は馬鹿にされたはず。

私：確かにねー。沖縄の方言じゃ全く分からないだろうね。

父：④だから、お父さんは家でも方言聞かなかったさ、他の人はもしかしたら家では喋っていたかもしれんけど。大人達はあまり子ども達に方言で喋らなかつた。だから、喋れないわけさ。そういえば中学位の時に修学旅行で東京で、デパートで友達呼び出ししてもらったわけさ、ほらあの一、迷子のやつ。そしたら、そのカウンターのお姉さんが、その子は日本語喋れる？って聞きよつたよ。

私：は？そんな風に思われてたの？沖縄って行ったからな？

父：⑤本当に沖縄がどんなかわかつてなかつたわけさ。

上記の会話から沖縄の人が方言を使うことで本土の人達からどのような印象をもたれていたかが見えてくる。戦後の沖縄は働く場があまり無かったため③下線部から出稼ぎが多かったことが分かる。同じ沖縄出身の人同士の間では方言で喋っていたため、本土の人からの印象が日本語を話さないというものになってしまった。また、④下線部で大人達が子ども達に方言を話すことをしなかったことから父は方言がほとんど分からないことが分かる。大人達が方言を使うことを控え始めたのは差別的扱いを受けたこと、そして標準語を話さない人が馬鹿にされたということで恥じていたのではないかと考えた。しかし、方言があまり分からない世代であるにも拘らず、本土の人達には沖縄の人は日本語を話せないという印象のままであった。

#### 4.2.4 分析から見えてきた事

これらの会話から戦後の沖縄を日本としてみると、沖縄の教育に標準語での教育や、方言札を取り入れることで言語の統一を通して日本政府が沖縄を日本として考え教育させていた。そこから、沖縄人が日本人であるという意識を持たせようとしていたと考えられる。また、沖縄人が本土での出稼ぎをしていた時にうけた差別によって、方言を使うことをやめた。そこから

自分たちが日本人として日本語が話せないということで馬鹿にされたことによって、日本語を話していたことから自分たちが日本人であることを意識したと考えた。しかし、父の話しからも方言が話せない世代にもかかわらず日本語が話せないと思われていたことで本土の人にとって沖縄人は日本人では無いと思われていた。このような扱いを受けてきたことで沖縄人は日本人と沖縄人という二つのアイデンティティーの間で揺れていることが生活の中から見えてきた。

以上4人のデータから太平洋戦争後の沖縄人の生活の様子を見ることが出来る。この章の分析を元に次の章で分析内容をまとめていく。

## 第五章 まとめ

この章では第四章のデータ分析を元に太平洋戦争後から日本復帰までの間、私の家族がどのような生活をしていたのかをまとめていく。

### 5.1 アメリカと日本の間に見えた沖縄の生活

沖縄の戦後は貧しい生活で、畑がある人は農業で生活する事が出来たが、祖母のような畑がない家庭では様々なものを作って売らなければ生活が厳しいものだった。そのため、終戦後の食事はアメリカからの配給をもらっていた。また、近所の人達でグループを作って芋を集めて生活をしていた。しかし、量が少なかったためにアメリカ人から食べ物等を盗んでくる人がいたことや戦時中に海に流れ着いた缶詰を命がけで拾ってくることでやっと生活できるというほど苦しい生活だったといえる。そして、母の子ども時代にはアメリカの食文化が入って来たことで沖縄の食文化が変わり始めたことが分かった。

終戦後当時の沖縄の人はほとんど方言で話していた。方言の使用の変化は祖父と父のデータから見ることができた。終戦後の教育から使われる教科書が標準語のものに統一されたという。そのため沖縄の方言は地域ごとで違う言葉であったため統一しようという意味もあり学校での方言の使用が禁止になったと考えられる。そのために学校で行われていたのが方言札であることが分かった。また、沖縄の外に出た沖縄人は沖縄人お断りと書かれたお店が多くあったといい差別的扱いを受けた。その原因の一つは方言しか話さな

かったということで、恥ずかしく思い標準語しか話さなくなったのではないかと考えた。これらの事から沖縄の方言の使用に関して人前で話すことがなくなり父の世代では方言を話せる人がほとんどいなくなったのである。

戦後の沖縄はアメリカ統治のため沖縄からの出入りにはパスポートが必要だった。そのため日本復帰までの間、沖縄から日本へ行くためのパスポートと、他の国に行くためのパスポートがあったためパスポートが2種類必要だった。そして当時の通貨がドルであったことから沖縄がアメリカの一部であったといえる。しかし、学校教育は日本語であったことから沖縄の人は自分たちが日本人という認識であったと考えられる。日本本土では沖縄はアメリカのもので沖縄人が日本語を話せないと思われていたことから、日本人だと認識していなかったのではないかとと言える。

上記の3つ事から太平洋戦争後から日本復帰までの沖縄で私の家族の生活の中から沖縄の戦後の生活が日本とアメリカという二つの国の文化の間で大きく変化してきたことが分かった。

## 5.2 まとめ

私の家族の生活を戦後から本土復帰までの様子から見てみて、それぞれの世代で沖縄の変化が表れていた。沖縄が戦地になる以前からある沖縄人がどのようなアイデンティティを持っているのかを生活の面からみていくことができた。パスポートや通貨、食文化の面からアメリカ人としての一面を持っていたことが分かり、言語統一の教育等から沖縄人が日本人としての意識を持たせるような政策等から日本人という面も見えた。そして、沖縄は二つの国の文化や政策の間で沖縄人として生きてきた。祖父、祖母、父、母の経験から私の家族から見た沖縄の生活の歴史を見ることが出来た。

## 参考文献

- 谷富夫 (2008) 『新版ライフヒストリーを学ぶ人のために』 京都：世界思想社  
谷川健一 (1940) 『わが沖縄 方言論争』 東京：株式会社 浩文社  
中野卓 (2003) 『生活史の研究』 東京：株式会社 東信堂  
林泉忠 (2005) 『「辺境東アジア」のアイデンティティ・ポリティクスー沖縄・台湾・香港』 東京：株式会社 明石書店